# 予備予備フリーラン　1年　佐藤 淳一

7月X日―僕はこの日を一生忘れないであろう。前日に初めて輪行し、又、初めての峠越えということで、朝、僕の心は、期待と不安とで複雑にゆれ動いていた。しかし、電車の中では、「何とかなるさ。」と思い、幾分開き直っていた。その後に、何が起こるかは誰も予想が、できなかったであろう。

さて、チャリンコも組み立て終わり、いよいよ出発した。まず出発した途端、異様な暑さで僕はいやな予感がしてきた。やがて、市街地を抜け、だらだらとした勾配のゆるやかな坂となった。僕は、上り坂に入ってから100mも進まないうちに、そろそろ暑さのためにまいってきた。適当なギヤの選択もわからないまま、一生けん命上っていったが、じりじりとみんなに差がついてきた。後から考えてみると、インナー・ローで上っていったのが、間違いであったようだ。とにかく、その時は、みんなが鬼のように、見えた。休み、休み上っていくうちに、やがて、意識がもうろうとしてきた。もうすでに前には誰一人見えなかったが、後ろには志波さんが、ついてきてくれた。もし、あの時、志波さんがいなかったら、僕はUターンをしていただろう。しかし、それとはうらはらに、足はついに動かなくなり、押して上ることもできなくなった。ついに、僕はダウンして、道の横にねてしまった。そして、消えゆく意識の中で、「これが、キタオルという現象なん

だなあ。」と、しみじみ思った。その時、志波さんが、ジュースをくれた。僕は、うれしくて涙が出そうだった。志波さんが、神様にみえた。それで、だいぶ元気を取り戻した。それから、わざわざ戻ってきてくれた小川さん、安井さん、西口さんなどと、チャリンコをおして上った。さすがに、頂上についた時はうれしかった。それから、昼飯を食べているうちに、激しい雨となり、雷が、落ちたようであった。ここで又、「山の天気は、変わりやすい。」という貴重な体験が、できた。雨が、降っていたとはいえ、始めての下りは、快快だった。書き忘れていたが、ここは、柳沢峠である。この下りでも、又、雨の日のブレーキのかけ方や、じゃり道の走り方などをおぼえた。奥多摩駅についてから、近くの店で飲んだビールは、本当にうまかった。

本当に、疲れた一日だったが、峠ごえの素晴らしさが、少しわかった。僕は、今でもあの日のことを、伝説の人物「北尾」を見るたびに、思い出す。

㊟「キタオる」と、いうのが、わからない人のために。

「キタオる」＝疲れた時の、一種の放心状態をいい、例えば、チャリンコで、車道の右側を走ったり、赤でも、無視して、つっ走ること。